

世界墳丘墓見聞録 ―みえてきた百舌鳥・古市古墳群の文化的意義―

京都橘大学 文学部 歴史遺産学科 准教授 中久保 辰夫

皆さん、こんにちは。京都橘大学の中久保と申します。今日はどうかよろしくお願いいたします。

私は、大学に入った18歳の頃の夏休みに初めて古墳の発掘調査をしてからこれまで、基本的には毎年、古墳の発掘調査をしてきました。来年で40歳になるのですが、人生の大半を古墳の調査で費やしてきたという、そういう人間になります。それで、古墳を調査するだけではなくて、世界各地にある古墳を、実は古墳という名前は日本の独特な呼び方でして、墳丘墓や墳墓と翻訳する場合が多いのですが、世界各地のお墓参りをしてきました。今日は、日本にある古墳が世界的に見ても独特な文化を持っているという、そういう話を中心にさせていただきたいというふうに思います。



これから古墳の話をずっとしていくわけですが、古墳時代は、西暦3世紀半ば、邪馬台国の女王卑弥呼が活躍した、その晩年ぐらいの時期から始まって7世紀に至るまで、約350年間続いた時代になります。北は東北、南は南九州まで、非常に広い範囲に共通した独特な前方後円墳という古墳が築造された、そういった時代になるわけです。

私は、古墳の勉強をするために、地図を準備して、古墳を見に行ったときに、いろんなメモも必要ですからメモ帳と筆記用具を用意して、もちろんカメラを肩にかけて、それでさまざまな古墳を見て参りました

(図1)。恩師である大阪大学の福永伸哉先生が中心になって、百舌鳥・古市古墳群を世界文化遺産に登録するにあたり、世界の墳丘墓文化

と比較したときに、日本の古墳文化というのは一体どんな特徴があるのだろうかという研究を、この10年、特に精力的に進めてられました。幸運にも、私も世界の古墳を見てまわるのに連れて行っていただきました。

そうすると、古墳という大きな墳丘を持つ墓が持っている歴史的な意義、文化的な意義、これも世界と日本では大きく異なるということが勉強できました。さらに古墳が置かれている環境も、非常に異なっているということもわかってきました。これから、いろんな墳丘墓の写真が出てきます。古墳の周りがどういった環境にあるのかも含めて、写真を見ていただければというふうに思います。新型コロナウイルスの世界的な蔓延^{まんえん}で感染防止

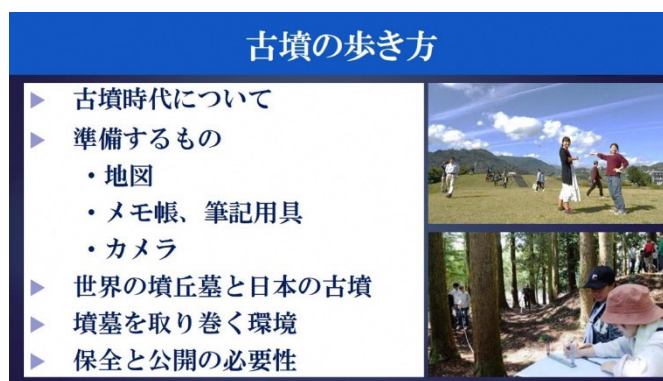


図1 古墳の歩き方（本日の講演内容）

の観点から、世界中を気軽に旅をするということもなかなか困難なご時世にあるわけですが、私のスライドを見ていただきながら、わずかばかりでも世界各地を旅した気分になっていただければ、というふうに思います。

まず、日本の古墳からお話をしていこうと思います。最初に取り上げたいのは、羽曳野市にある^{こんだてびょうやま}菅田御廟山古墳



図2 菅田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）の内濠・内堤

（応神天皇陵古墳）になります。陵墓ですから、兆域への立入りは禁じられています。ただし、考古学・歴史学の16の学会・協会が毎年1年に1回、「陵墓に立ち入らせていただきたい」という要望をずっと出しておりまして、見学する機会があります。この写真は、2011年2月に撮影したものでして、ちょうど10年ほど前になります（図2）。菅田御廟山古墳の内堤に立ち入る、そういった観察の機会がありまして、私はそこに参加することができました。

今ご覧いただいている写真は、そのときの写真になります。墳丘の本体ではなく、周濠の周りをめぐる堤ですけれども、堤をこうやって見学すると、周濠という古墳の周りを取り巻いている濠の部分が、非常に広いということがよくわかりました。写真を見ていただくと、人の大きさと濠の大きさ、皆さんから見て左のほうに写っているのが墳丘本体になるので、非常に大きい。

私は、この見学をする少し前に、大学の近くにある古墳を発掘していました。菅田御廟山古墳は5世紀の前半に造られた古墳で、今見ていただいている古墳（^{まちかねやま}待兼山5号墳）



図3 待兼山5号墳（豊中市）の発掘調査

は、豊中市にある5世紀の後半に築造された古墳です（図3）。少し時期差はあるのですが、同じ5世紀という時代に造られた古墳になります。見ていただけるとわかるように、これは非常に小さいのです。溝も浅くて、墳丘はあまり高く積まれていなくて、もう削平されていました。こういうのを見ると、同じ時代の、同じ古墳とは言っても、一方は非常に大きい。もう一方は非常

に小さい。誉田御廟山古墳の周濠の中に、待兼山5号墳が入ってしまうぐらい小さいということになります。

こういった古墳の規模の違いは、日本の古墳文化を考える上では非常に重要です。日本の古墳は、鍵穴形をした前方後円墳、鍵穴の中でも丸い鍵穴をしたのが前方後円墳、四角い頭をしたのが前方後方墳、丸い形をした円墳、四角い形をした方墳という違いがあります。四つの基本形状は、政治的な派閥と

か、出自とかを表すというふうに使われています。一方で、先ほど見ていただいたように古墳は大きさに格差があって、これは墳丘に投入できる労働力を示すので、被葬者の、もしくは後継者の実力を示すものだろうというふうに理解されております（図4）。こういったところを研究する上で、一番大切なのは古墳の大きさを正確に測るということ、そして古墳の形を正確に把握するということになります（図5）。これが、発掘調査で非常に丁寧に古墳の大きさを研究している、一つの大きな理由になるわけです。

実際、世界各地の墳丘墓を見ていくと、大きさを聞いても「大きさは大体これぐらいだ」とか、形状についても「もともとの形はどうだったんですか」ということを聞いても、日本ほど正確に答えられる国が、地域が、あまりないということもわかってきました。日本で、墳丘の調査にこだわりを持って研究をしてきたというのは、それだけ墳丘に意味があったということにもなるかな、と考えています。

次に、関西を出て各地域の古墳を見て参りましょう。5世紀は各地域に大きな古墳が築造された時期でして、南の方に行きますと、鹿児島県の横瀬古墳、全長 129 メートルの

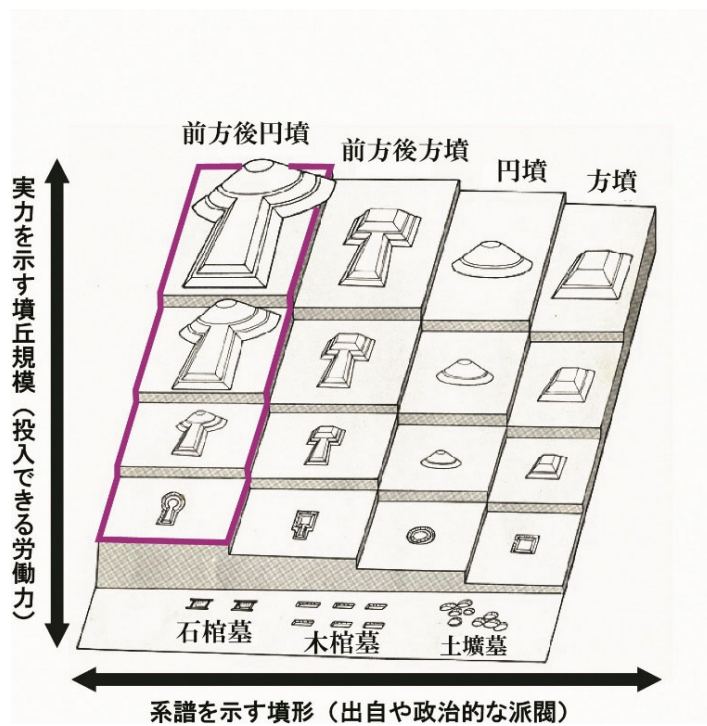


図4 古墳に見られる秩序ある多様性



図5 古墳の形を正しく測る



図6 横瀬古墳（鹿児島県）



図7 角塚古墳（岩手県）

非常に大きな古墳です（図6）。古市古墳群や百舌鳥古墳群でも出土している、大阪の陶器窯跡群で作られた須恵器が出土しています。もちろん、南九州独自の埴輪も出土している古墳になります。北は、全長43メートルの角塚古墳が岩手県にあります（図7）。積雪した角塚古墳を私もぜひ見たいというふうに思って、長靴を履いて角塚古墳に行ってきました。南北で言いますと、直線距離にして1300キロメートル離れても前方後円墳が築かれている。こういうことも、日本の古墳の特徴になります。例えば、他の国ですと、王様の墓とか、有力な貴族の墓というのは、都の周りに集中して築かれていたりとか、そういった墓を形成する地域が限定されていたりす

るのですが、日本列島の場合は非常に広い地域に、各地域の有力者が共通の形を採用したということは、これもまた日本の古墳文化を考える上で、特徴的なこととなります。こういったあり方が、東アジア世界の中で同じなのか、それとも異なるのか、ということが次に疑問として上がってくるわけです。

そこで日本列島を飛び出して、まず朝鮮半島に目を向けていきましょう。古墳時代に併行する時代は、朝鮮半島では三国時代と言います。三国時代にどういうふうなお墓造りをしていたのか、ということを見ていきたいと思います。今回の資料は、私が現地に訪れた古墳や墳丘墓を中心に紹介しています。三国時代を代表する墳墓としては、高句麗の將軍塚、太王陵がありますが、割愛します。新羅や百濟、そして加耶といった政治勢力の墳墓を見ていきましょう。

まず朝鮮半島南東にあった加耶諸国です。日本と非常に結びつきが強い政治勢力です。加耶を代表する大成洞古墳群、実は墳丘がないのです（図8）。わずかにはあったと思われるのですが、独立丘陵の上をそのまま掘り

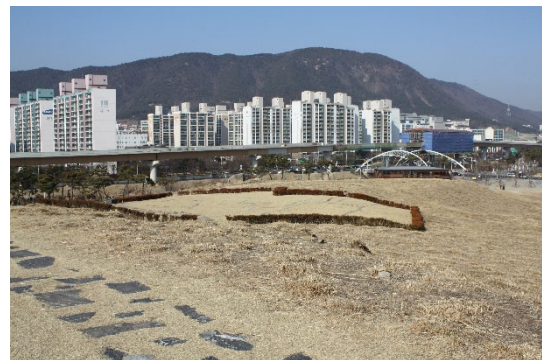


図8 大成洞古墳群（大韓民国）



図9 筒形銅器（福泉洞古墳群出土）

込んで埋葬施設を構築しています。墳丘部分のみに注目すると日本と全く違うのですが、例えば筒形銅器というものが副葬されています。これはヤリや銚ほこ いしづきの石突の部分に取り付けられたというふうに考えられています。例えば、羽曳野市の庭鳥塚古墳にわとりづかから出土しています。同じものが、この写真に挙げている大成洞古墳群、福泉洞古墳群ボクチョンドンから出土しています（図9）。よく似たものを副葬しているのですが、お墓の造り方というのは、全く違うということがわかってきます。



図10 昌寧 校洞古墳群（大韓民国）

次に校洞古墳群キョンドンは円丘の墳丘墓を築造しており、写真を見ると日本の古墳とよく似ているように見えます（図10）。

さらに新羅には、皇南大塚こうなんおおつかや天馬塚てんまづかなど、巨大な墳丘墓が築かれました。皇南大塚を写真で表しています（図11）。一見すると、よく似ているように思うのですが、何が違うかということですね。朝鮮半島三国時代、特に加耶や新羅の地域で造られた墳丘墓は、埋葬施設をまず造って、その後に墳丘を盛るということをします。これは墳丘が後に来るので、墳丘後行型というふうに呼ばれているものです。



図11 新羅 皇南大塚（大韓民国）

日本の場合は、地面があって、もしくは地形を掘削して形を造って、まず先に墳丘を造って、その過程の中で埋葬施設を造って、もしくは墳丘を造った後に埋葬施設を掘り込んで造るということになります。朝鮮半島と日本列島とでは、墳丘の築造方法が、前後で異なっている。日本の場合は、基本的には墳丘先行型になるということになります。同じような墳丘があっても、その順序が違うということになります。

皇南大塚は、さらに見ていただくと墳丘をこうやって盛っているんですけども、日本の古墳研究者が見ると、少し違和感があるところがあります。何かというと、日本の古墳は、墳丘頂上に平らな面を設けて、そこで盛大に葬送儀礼を行うということになります。一方で、皇南大塚を見ると、この墳丘が完成したときには、王はもう埋葬されているわけです。葬送儀礼が先にあるということです。その後に、こういうふうに大きな墳丘を盛っています。墳丘上に、儀礼をするようなスペースを設けたりということをしていないとい

うことになります。

百済の墳墓を見ていきましょう。百済王陵は、^{ソクチョンドン}石村洞古墳群です（図12）。多くの日本の古墳と違って、積石を基調としているという点が大きく違ってくる、ということになります（積石墓は、香川県などにありますので、日本で全くないわけではありません）。

次に^{ぶ、ねいおう}武寧王陵について取り上げます。高槻市にある^{いましろづか}今城塚古墳は、考古学者はそこを真の継体大王の墓であろうというふうに考えているのですが、被葬者である継体大王の、国際政治社会におけるパートナーになった王が、百済の武寧王です。写真で見えていただきますと、石室の写真になるわけですが、その入口になります（図13）。日本の今城塚古墳と比べると、非常に墳丘が小さいです。三国時代と古墳時代では、墳丘に対する考え方の重みが違うということが、こういったことを見るとよくわかってくると思う写真なので、ここで取り上げさせていただきました。

次が、朝鮮半島の中でも、南西海岸のところに^{ヨンサンガン}榮山江流域という地域があります（図14）。大阪平野では、5世紀代に朝鮮半島から移住してきた渡来人が住んだ集落跡が見つかっています。その故郷の一番の有力候補が、この榮山江流域という地域です。ここでも墳丘墓が発掘されています。実は、この地域には前方後円形の古墳が、6世紀前半代を中心に築造されています。この被葬者が、日本列島に非常に関係が深い人なのか、それともこの地域の榮山江流域の人が前方後円墳を採用したのか、百済中央との関わりはどういうふうにあったのか、というのが非常に議論になっています。私は、いろんな要素が、前方後円形の古墳に、日本列島の九州に系譜を持つようなルーツもありますし、近畿にルーツがあるようなものもありますし、もちろん在地にルーツを持つようなものもあります。こういったことから、やはり各地域の、いろんな交流があったような人たちが被葬者としてふさわしいんじゃないかな、と考えています。その人の出身地は、とか、血縁はどうなっているのか、というふうに聞かれると、やはり骨できちっと分析する必要があるだろうというふうに考えているところです。

このように朝鮮半島各地の墳丘墓を見て参りますと、日本列島のように非常に広い地域に、同じような形の、もしくは同じように墳丘の大きさによってランキングを設けるとい



図12 百済 石村洞古墳群（大韓民国）



図13 百済 武寧王陵（宋山里古墳群）

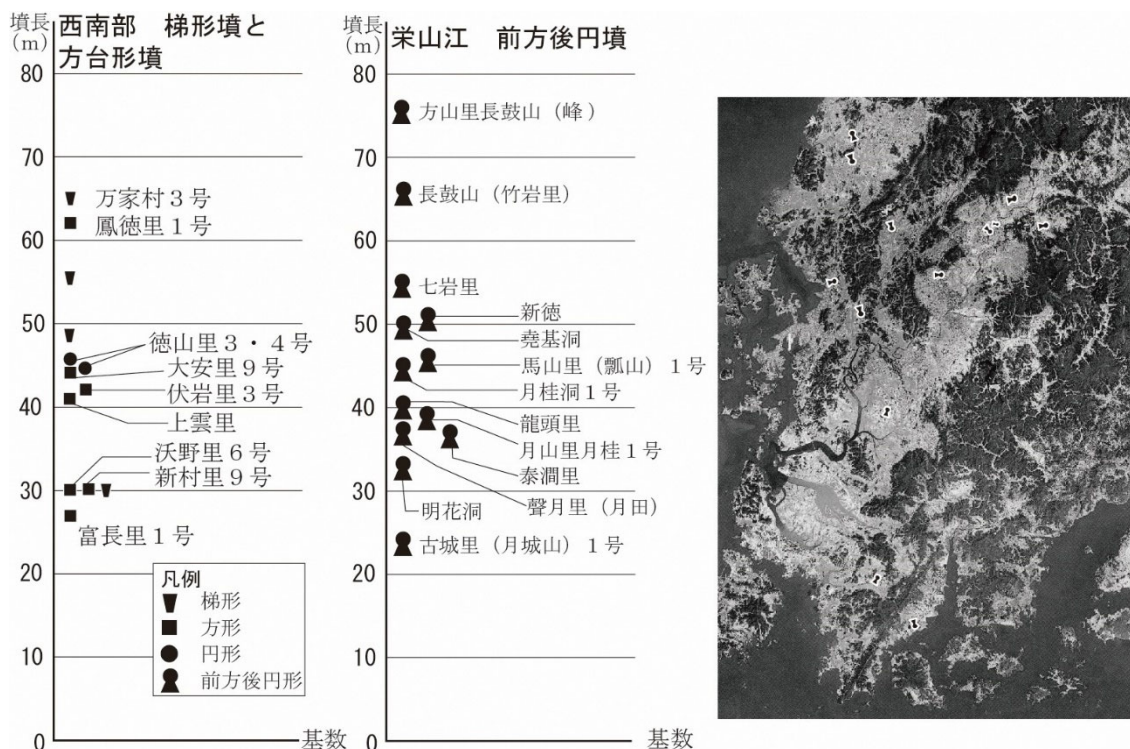


図 14 栄山江流域の墳丘墓と前方後円形系墳

ったような、共通したあり方が見られるかという、そういうわけではありません。各政治勢力やさらに細かな地域でそれぞれの墳丘の築造方法があったり、そのルールが異なっていたり、そういうことが見て取れます。従いまして、東アジア世界の中でも、日本の古墳文化というのは、非常に特徴的だということがわかってくるわけであります。

同時期の中国の墳墓については、さらに様相が異なってくるところであります。ここで、少し前の時代も含めて東アジアの墳墓のことを考えたいと思います。

まず取り上げたいのは、秦の始皇帝陵です。これ、今写真でご覧いただいているのが秦の始皇帝陵の墳丘本体です（図 15）。

漢の時代の陵墓も見ていきましょう。この写真は、前漢の武帝の陵墓になります（図 16）。茂陵と言います。山のような墳丘が武帝の墓になるわけです。ここで非常に興味



図 15 秦始皇帝陵（中華人民共和国）



図 16 前漢武帝茂陵（中華人民共和国）

深いのは、中国の場合、文献で、皇帝に仕えた側近たち、将軍たちが明瞭でして、しかもそれが墳丘墓として現存しているというところがあります。みなさんから見ていただいて右手に映っているのが、武帝に仕えた^{かくきよへい}霍去病という人物のお墓になります（図 17）。茂陵と陪冢（^{ばいちょう}陪塚）である霍去病墓は、陵園の中で配置が比較的明瞭に把握できます（図 18）。皇帝に仕えた側近たちの墳墓が、こういうふうと同じお墓が造られているエリアの中に、うまくレイアウトされているという構造が漢の時代にあります。

こういったあり方というのは、実は百舌鳥・古市古墳群でも見て取ることができます。前方後円墳の周りに陪冢を従えている古墳であるとか、大・中・小の古墳が展開しているということが、古市古墳群、百舌鳥古墳群の一つの特徴になると思います。例えば、^{のなか}野中古墳という、藤井寺市にある古墳は、小さな古墳でありますけれども、ここから 11

セットの鉄の^{よろい}甲と^{かぶと}冑、それが出土したものです（図 19）。これは陪冢という古墳ですけれども、その当時の大王や王族に仕えた側近の墓であろう、というふうに私は考えております。政治的な身分であるとか、役職、これを古墳として表す、古墳として人物の死後も



図 19 野中古墳出土甲冑



図 17 霍去病墓（中華人民共和国）



図 18 中国前漢武帝茂陵と陵園

も社会や政治的記念物として記憶させていくあり方は、実は中国古代のあり方とよく似ているんじゃないかな、と思います。私が今進めている古墳時代の研究の一つの内容になります。ただ、アジアの中でも、さまざまな共通点が見える部分と、そもそもの墓造りの中で相違点がある部分というのがあります。

次は、アジアから出て、ヨーロッパのほうの墳墓を見ていただきたいと思います。ヨーロッパの墓で、まずフランスに行きましょう。世界各地で、100メートルとか200メートルを超えるような、墳丘墓を見に出かけて行きました。日本にいと、400メートルを超える、例えば^{はかやま}誉田御廟山古墳ですとか、200メートルを超える^{はかやま}墓山古墳とか、そういうのがあって、もう200

メートルとか 100 メートル台ぐらいですと、日本の古墳時代を研究していると、そんなに言うほど珍しくはないな、とも思うわけです。もちろん大規模な古墳であり、重要な部分ではあるのですが、トップではないなというふうに感じます。しかし、日本列島を飛び出して世界各地のお墓を見に行くと、100 メートルを超えてくるようなお墓というのは、ほとんどありません。実は、朝鮮半島の墳墓の中でも、中国の皇帝や貴族層であっても、100 メートルを超えてくるような墳墓を築いた人というのは、なかなか見当たらないのです。



図 20 バルヌネズ墳墓（フランス）

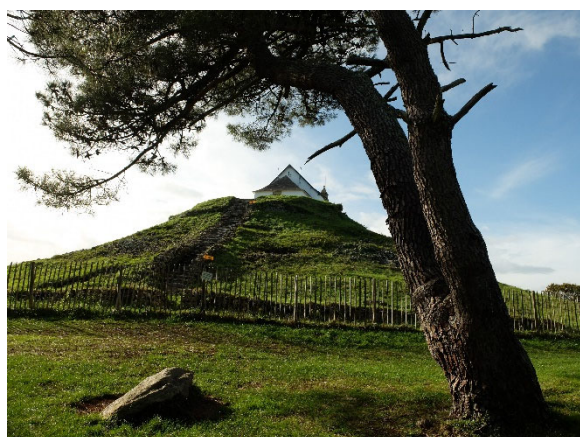


図 21 サン・ミッシェル墳墓（フランス）

その中で、ヨーロッパのフランスに非常に大きい墳墓があるということで見に行ってみました。バルヌネズ墳墓という積石墓で、紀元前 3000 年から 4000 年の墳墓になります（図 20）。今から 5000 年も昔にこんなに大きな、石を積んだ墳墓があるんだと勉強なったんですけども、現地の考古学者に聞くと、この墳墓というのは一回の築造で完成したというわけではないんですね。1000 年を超えて、最終形態がこういう形になった、と伺いました。日

本の古墳は、一人ないしは複数人のために、大きな墳丘を築くわけですが、ヨーロッパ新石器時代の場合はそうではない。1000 年かけた結果であるということです。同じ時代、100 メートル級のサン・ミッシェル墳墓も紹介します（図 21）。上にキリスト教の教会がありますが、墳墓そのものも非常に大きなもので、中は通路になっていて、日本で言う横穴式石室のような埋葬施設がある墳丘墓になります。これも積石墳丘が一度に造られて、それで複数の埋葬施設が設けられた。造墓造築を続けていく中で、最終形態がこうなったということになります。

さらにイギリスにも行きましょう。イギリスには、同じく新石器時代にウェストケネット墳丘墓というお墓があります（図 22）。全長約 76 メートルある墳丘墓です。埋葬施



図 22 ウェストケネット墳丘墓（イギリス）

設は大きな石を積んで構築し、日本で言うところの横穴式石室のようなものです。石室の内部からたくさんの人骨が出てきている、そういう墳墓です。この墳丘墓も、一人のため、ないしはごくごく限られた数人のための墳墓というわけでは全くありません。大人数の、長期的な埋葬の地だったということがわかっています。

このように見て参りますと、日本の古墳築造との違いがよくわかります。百舌鳥古墳群の大仙陵古墳、考古学界のほうでは、仁徳天皇陵古墳のことを大山古墳であるとか、大仙陵古墳とか、そういうふうに呼ぶわけですけども、大仙陵古墳は 15 年 8 ヶ月かかったということが、試算で出ています (https://www.obayashi.co.jp/kikan_obayashi/detail/kikan_20_idea.html)。

「長いな」と思います。大学 1 年生で巨大な古墳築造に関わると、古墳が完成すると私ぐらいの年齢になるという、そういう年月になります。日本の古墳を勉強していると、「長いな」というふうに思うんですけども、ヨーロッパ先史時代のように 1000 年を超えてなってくると、平安京を造り始めてから現代になっても、まだ埋葬を続けているという、そういうふうな感覚になります。とてつもなく長期にわたって墳墓を使い続けるという、そういう文化が世界にはある、ということに気づかされました。新石器時代は、農耕社会が広がった、そういった時代です。古墳が造られたような時代は鉄器時代で、階層差が顕著で社会が非常に複雑化した段階です。新石器時代の墳墓と日本の古墳時代を比較するのは、あまり適切じゃないんじゃないかという、そういう意見もあるかもしれません。

それで、ドイツの鉄器時代の墳墓にも行って参りました。これはマグダレーネンベルグ墳丘墓で、ヨーロッパの中で最大規模の墳丘墓になります（図 23）。実は、もともと墳丘がどれほどの大きさであったのかということはわかりません。さきに見た朝鮮半島の墳丘墓と同様に墳丘後行型です。最終形態として墳丘が築造されるということになります。ドイツのホーミッセル墳丘墓も、鉄器時代の墳丘墓です（図 24）。埋葬施設が確認されています。

ヨーロッパの鉄器時代墳丘墓と日本の古墳では、発掘調査の過程が大きく違うことになります。日本の発掘調査では、まず墳丘の大きさを確定します。墳丘の大きさはどれぐらいか、墳丘の部分、部分に最小限の調査区を開けて、「この古墳の前方部の開き具合はこうなのか」、「もうちょっとまっすぐなのか」とか、「どれぐらいの角度なのか」とか、そういうことをしっかり確定します。その上で、埋葬施設



図 23 マグダレーネンベルグ墳丘墓（ドイツ）



図 24 ホーミッセル墳丘墓（ドイツ）

の調査のときには、レーダー探査や電気探査をしながら、慎重に慎重に掘り下げます。それで、墳丘はもともとこういう形だったということをしっかりと研究します。一方、ヨーロッパの鉄器時代墳丘墓の場合、埋葬施設は墳丘の下にあるわけですね。それを発掘しようと思うと、墳丘を結構大きく取り除かなければ下のところまでは到達できない。過去の調査では、この墳丘の形態や形状を十分に調査されないままに埋葬施設の調査がされたという事例もあります。そうすると、一度掘り上げてしまった土を元通りにするというのは、ほぼ不可能です。墳丘の正確な形がかつてどうあったのかということを実証するというのは、非常に難しいということになります。日本の古墳研究のあり方、墳丘に力を注いで研究しているというのは、埋葬施設の構築方法の手順の違いが関係しているということも、こういった事例を見るとわかってきたわけです。

最後に、アメリカ大陸の方の墳丘墓を見に行こうということで、見に行きました。全長 300 メートル近くあるカホキア遺跡の墳丘です（図 25）。これはアメリカのネイティブアメリカンの遺跡です。世界遺産の遺跡です（Cahokia Mounds State Historic Site）。発掘調査によって、マウンドには大きな建物が建っていたということがわかっているんですけども、これは実際墳丘墓かどうかわかってない、そういった遺跡です。こういったもの



図 25 カホキア遺跡 マンクス・マウンド

（アメリカ合衆国）

が墳丘墓かどうかというのは将来の調査にゆだねられている、と言っても過言ではありません。これがこういった遺跡なのかというのが、アメリカの学者たちが非常に関心を持っていることになります。

さて、もう時間が参りましたので、まとめていきたいというふうに思います。世界各地のお墓参りと言いますか、墳丘墓の比較をしていきますと、やはり日本の古墳というのは、非常に特徴的なものだということがわかって参りました。

一つは、ヨーロッパなどと比較すると、築造と埋葬行為が比較的短期間であるということになります。おおよそ一、二世代におさまるということになります。1000 年を超えてとか、数百年を超えて、墳丘墓を造り続けるといった性格のものではないということですね。

また、基本的に墳丘が先に築造されるということです、これは調査の特徴として、墳丘を非常に丁寧に調査しているということと関係すると思います。そして何よりも、墳丘そのものが儀礼空間としての意味を持っているということです。それは、被葬者の後継者にその権力を譲るような儀礼が行われた舞台であるということです。これは墳丘を埋葬施設

構築の後で造っているような社会では、あまり考えられないようなものになります。

そして、そうした墳丘を古墳時代社会というのは統治の手段として用いられたのではないということ、墳丘そのものが非常に政治性を帯びているということです。これは大阪大学の福永伸哉先生が最近強調されていることです。

また、古墳を取り巻く環境は、写真を見ていただくと意外と周りが都市化してない、ということにお気づきになった方もおられるかもしれません。古市古墳群の場合であります、周囲が市街地と密接しているところにある。これは、開発の危機が迫っているということでもあります。

世界各地の石で積まれた墳墓とか、あとは芝生で覆^{おほ}われている墳丘墓などを見てきたかと思います。しかし、日本の陵墓などは樹木に覆われているという問題もあります。台風等での倒木などによって、墳丘が壊れないように配慮する必要があります。また、周濠が意外と世界各地の墳丘墓には見えなかったと思うんですね。墳丘の周りを水で湛^{たた}えているというのも、日本の大規模な古墳の特徴となります。周濠の水質なども注意する必要があります。こういった観点から、やはり精密な墳丘の測量図、現時点での、こういった大きさで、こういった形をしているのか、というのを把握する必要というのは、やはりあるだろうということになります。

最後に、こういった墳丘というのは、日本の場合も、世界各地の場合も、実はさまざまな伝承がある、ということもわかってきています。そういったことを考えると、こういった古墳や墳丘墓は常にその地域の社会と密接に関係があった、ということも実はわかってきております。今後どうあるべきか、ということなどを含めて、それは後のパネルディスカッションのほうでお話ができればというふうに思いますので、ひとまず私の見えてきた百舌鳥・古市古墳群、もしくは日本の古墳の、歴史的、文化的意義に関するお話は、ここで終了させていただきます。ご清聴いただき、どうもありがとうございました。

【参考文献】

国立歴史民俗博物館（編）2018『世界の眼でみる古墳文化』

高橋照彦・中久保辰夫（編）2014『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学大学院文学研究科

福永伸哉 2019「日本の古墳と世界の墳丘墓」『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』（課題番号：15H01900）平成 27 年～30 年度科学研究費助成事業 基盤研究（A）（一般）研究成果報告書 福永伸哉・上田直弥編 大阪大学大学院文学研究科

Knopf, T., Steinhaus, W., & Fukunaga, S. (Eds.). (2018). *Burial mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives*. Archaeopress.